学校だより

磨光

令和７年 10 月 24 日(金)
三豊市立本山小学校
No. 16
発行者：中田　祐二

先日の新聞各紙に、桑原志織さんがショパン国際ピアノコンクールで４位入賞したという記事が載っていました。桑原さんはインタビューの中で「今後どのようなピアニストになっていきたいですか」と聞かれ、こう答えていました。

> 現実の世界はやっぱりきれいごとだけでは片付かないものがたくさんありますけれど、音楽の美しさや感情的な共鳴を通してひとときでもそういう現実の喧騒から逃れられるような瞬間をお届けできるような演奏をしていきたい。

22 日に小学校にお呼びして開いた「よんでんアンサンブルコンサート」は、まさしくそういった演奏で、心の中のもやもやも、いらいらも、いつの間にか音楽の調べが流してくれていました。

でも、この日の演奏は、プロの演奏の素晴らしさが半分。そして、あと半分の素晴らしさは、それを支えた子どもたちの演奏でした。

あと半分の名演奏

一つは、子どもたちの手拍子です。チェリストの江島直之さんが「手拍子したくなったらしていいよ。」と言うと、子どもたちは最初、何でもかんでも手拍子を入れようとしていました。朗々と歌うヴァイオリンに手拍子をし始めた時、（あ、そこはたたくところと違う……。）と思いながら見ていたのですが、そのうち、たたきどころをわきまえてきて、曲想に合わせて、強い手拍子、小さい手拍子と使い分けるようになりました。子どもたちもなかなかやるものです。

もう一つは、アンサンブルに合わせて歌った「ふるさとの色」です。アンサンブルの方々も、「この歌がよかった。こんなにいい曲と思っていなかった。子どもたちが歌ったから、そう思えたのでしょう。」と言ってくださいました。

子どもたちの歌は、一般的な“うまい歌”というのとは少し違います。今ここでしか聴けない歌。録音してしまうと魅力が減じてしまう歌。この子どもたちだからこそ歌える歌。こういう言い方がふさわしいかもしれません。

翌日、一人の男の子が話しかけてきました。

「校長先生、もう一回、昨日の人、呼んで。」

理由を尋ねると、昨日、その子は欠席していて演奏を聴くことができなかったとのこと。

大丈夫です。きっといつかまた聴くことができます。もっと下手な人にはなりますが。全校朝会で。

次の日は、読書の秋

23 日の朝は、上級生と下級生がペアになり、互いに本の読み聞かせをしました。

中に、読むのがあまり得意ではない子がいました。それでもその子は 15 分近くをかけて、一つの物語を読み通しました。最初は本を下級生の方に向けて読んでいたのですが、あまりに一生懸命に文字を追っていたのでしょう。しだいにその子は相手の子への意識が遠のいて、本とだけ向き合い、読むことに必死になっていました。普通の読み聞かせの姿とはちがうのですが、その子の一生懸命が伝わってきて、それはそれで、いい読み聞かせでした。

【ペア読書のブログはこちら↑】